

キリストの光のキリスト

恐い神？

年間第33主日(聖書週間へ25日まで) 11月18日(ルカ21・5-19)

「そんな悪いことをすると地獄に行くよ」「ちゃんとしないと罰が当たるよ」「世の終わりがいつ来るかわからないから、告解をしていつも心をきれいにしていな

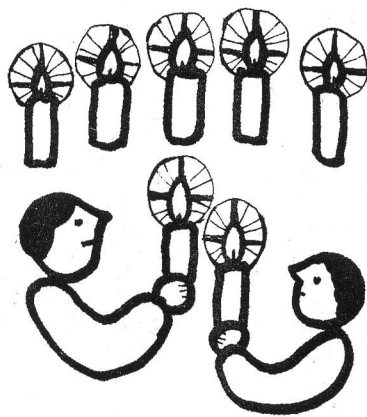
とだめだよ」…幼少のころ、よく聞かされた言葉で、今でも心の底に残っている。わたしにとつて

の神は、いつもわたしの右後方四十五度からにらんでいる恐い神であつた。今は違うが…。

教会学校ではよく天国と地獄、そして煉獄の話が聞かされた。当時、要理を教えてくださったいて、今は誓願五十周年を迎えたシスターによれば、そんなことはな

地獄に行かないために悪いことをしない。天国に行くために善いことをする。これが信者の生き方だと思っていた。

その後、聖書に触れるようになり、恐い神の像が次第に変わって



いった。司祭になったころはまだ「幼少時の恐い神」がちらちらと姿を現していたが、その姿は愛に包まれた優しい平和な神の姿に変わっていった。今は、信者であつてよかったと思っているし、司祭にしていただいてよかったと

喜んでゐる。そして、愛そのものである神の姿、神のこころを伝えていければ…と望んでゐる。

わたしたちの信仰は誰かから伝えられたもの。信仰といえばなんとなく抽象的なものではあるが、例えば、自分が信じている神はどのようなお方であるのか…を考へてみればいい。わたしたちが信じている神のイメージは誰かから伝えられたもの。親から、他人から、知人から、司祭から…。伝えられた経路はさまざま。そして、ひとたび心に落ちた神のイメージは、その底に根強く残る。伝えられた神のイメージは次第に絶対的なものとなつていく。

「神父さま、もう聖書の話は結構です。聖書は分かりません。難しいです。もっと生活に密着した具体的で分かりやすい話をしてください」と言われることがあ

る。聖書は難しいものではない。

自分の中にある既成概念、すでに自分で確実だと思ひこんでいることと違うから、難しいと感じる。

聖書に示されている神の姿が、自分の中で「出来上がっている神の姿」と違うから、それを受け入れるのが難しいのだ。聖書の中にイエスの教えの原点がある。そこに神の真の姿が示されている。

幼児期に受けた信仰や神の姿は大切なものだ。しかし、それは出発点にすぎない。そこから真の神との出会いの旅が始まるのである。自分の人生を歩みながら、しばし立ち止まり、聖書を鏡

のようにして自分の白紙の心を映してみよう。

聖書週間が始まる。

今週の福音

19日・月	ルカ	18・35—43
20日・火	ルカ	19・1—10
21日・水	ルカ	19・11—28
22日・木	ルカ	19・41—44
23日・金	ルカ	19・45—48
24日・土	ルカ	20・27—40

（山元眞＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）